

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省特別授承認雑誌第三五二号
昭和三十一年一月二十五日印刷 昭和三十一年一月一日発行

第二十六卷

第二号

浄土



二月号

浄土
五

既刊

浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円・十八円

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 本願の不思議にて
3. 人生は信ずる心から
すべてを包む愛
- 6.

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円・二十八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
 2. なやみとまよいのもと
 3. 信ずるところ
 4. 美わしき世界の建設
- 惻々と人の心を打つ失明の体験 森 赫子
文学の世界からみた無常の話 武田 泰淳
宗教の信仰を遺文にみる 佐藤 賢順

甦えるいのち

A五版・二十七頁
定価三十円・二十八円

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

二十部以上 五分引
五十部以上 一割引
百部以上 一・五割引
二百部以上 二割引

浄土 二月号 目次

表紙・扉絵 結城天童

さし絵・カット 加藤金一

浄土宗日常和讃勤行法……………吉田定久訳……………(2)

わかる仏教と出来る仏教……………竹中信常……………(4)

称名一途に……………三井高陽……………(6)

畢竟依……………石原有政……………(9)

パンサイ……………武田秀郷……………(19)

心のおい……………秋 松……………(29)

惣れ惣れと念仏申そう……………太田千秋……………(12)

見えぬ世界……………森 赫子……………(22)

実話悪魔の領土……………岡 幸一……………(26)

高僧伝勤息義城……………大橋俊雄……………(24)

法然上人の感化……………村上博了……………(30)

新編百喻経②……………伊東拳位……………(12)

信仰相談…………………………(32)

石川啄木(1)……………須藤隆仙……………(34)

扉の御法語……………「法然」を読んで……………(36)

童心仏心……………(39) 会員だより……………(40)

釈尊の生涯(七)……………佐藤密雄……………(14)

浄
土

二
月
號

人の命は食事の時、むせて死

する事も有なり。南無阿弥陀仏

とかみて、南無阿弥陀仏とのみ

入べきなり。

法然上人御法語



浄土宗日常和讃勤行法

香偈

願此香煙雲
徧滿十方界
供養一切仏
尊法諸賢聖
無辺仏土中
受用作仏事
普薰諸衆生
同生安樂刹

床しき香を
世に満てる、
如来にささぐ
菩薩にも、
仏の みもとに
仏事を作し、
衆生と共に
安樂へ。

三奉請

奉請弥陀世尊
入道場
奉請釈迦如来

請い奉る 弥陀世尊
道場に入り玉え、
請い奉る 釈迦世尊

入道場

奉請十方如来
入道場

道場に入り玉え、
請い奉る 十方世尊
道場に入り玉え。

歎仏偈

天上天下無如仏
十方世界亦無如
世間所有我尽見
一切無有如仏者

天上天下 広き世に
仏にまさる方無けん、
世間の所有の理を
既に悟りし方なれば。

懺悔偈

無始已来無量罪
今世所犯極重罪
日々夜々所作罪
念々歩々所起罪

昔遺せし 多き罪
今また犯す 重き罪、
日々夜々に 作る罪
念々歩々に 起す罪、

念仏威力皆消滅
命終決定生極樂

仏の威力は 皆消して
定んで浄土に生れしむ

十念

献供

一心奉請阿弥陀仏
等一切三宝 願入道
場受我供養

只管に請う、弥陀仏等
一切三宝 道場に入り
我この供養を受け玉え

十念

開經偈

念々思開浄土教
文々句句誓当勤
憶想長時流浪苦
專心聴法入真門

念いを浄土に潜めては
誓いを娑婆に勤めてぞ
長き流浪の苦を厭い
清き法理の門に入れ。

読経

回向偈

十方恒沙仏
六通証知我

世の恒沙なる御仏の
六通に我を知ろしめせ

今乗二尊教
広開浄土門

いま二尊の御教えに
広く開かん浄土の門。

六道分身随類現
為説劫法証無生

六の巷に身を分ち
妙法を説いて証らしむ

帰僧息諍論
同入和合海

恒に僧を敬いて
和合の榮 示さんん、

又 十念

念仏一会
総回向偈

相還

願共諸衆生回願
往生 無量寿国

我 衆生と願うなり
無量の寿の彼の国を。

一切精靈生極樂
上品蓮台成正覺
菩提行願不退転
引導三有及法界

精靈一切 極樂の
上品 蓮台に覺り得て
菩提の行願は三有を
法の世界に導かん。

讚仏諸功德
無有分別心
能令速滿足
功德大宝海

弥陀が功德の数々を
讚えて分別 心なくば
能く大宝の海原に
喜び得しむ速かに。

誓到弥陀安養界
還来穢国度人天
願我慈悲無際限
長時長劫報慈恩

誓いて到らん弥陀の国
還りて来らん娑婆の国
広く人天慈くしみ
永く仏恩報いなん。

又 十念

十念
三唱礼
又「三帰礼」

十念
退座

門々不同八万四
為滅無明果業因
利劍即是弥陀号
一声称念罪皆除

教えの門は八万四
無明の因は滅せども
劍の御名に如かざらん
罪みな除く一声に。

歸仏得菩提
道心恒不退
願共諸衆生回願
往生 無量寿国

恒に仏を敬いて
道心の歩進めなん、
我 衆生と願うなり
無量の寿の彼の国を。

又 十念
攝益文

菩薩大悲弘誓願
不惜身命度衆生

菩薩の大悲弘くして
命惜まで衆生の為、

願共諸衆生回願
往生 無量寿国

智えの扉 開かなん、
我 衆生と願うなり
無量の寿の彼の国を。

②の「道場」を「この道場」とする
も可。
この他細部の点で、例えば⑫の「讚
仏偈」は総回、向偈に通ずるとしたが
如何等。御教示いただければとの訳者
の意向です。

— 編集部 —



わかる仏教と出来る仏教

竹 中 信 常

一

先般、京都で開かれた教学大会の合同討議では、宗乗と宗学とが時代によって変るものか、変らぬものかという点で、大分活潑な論義が展開された。

宗祖の教学は厳然たる真理として、時代・環境に超絶して不動不変であるべきであるという意見と、宗祖も矢張り時代人として生きられたのであるから、その本義は変らぬにせよ、言表宣示は時代的に変わるべきであるという意見とであった。無論、このような至重の問題に軽々しい結論を下すことは避けられたのであるが、しかしこれが現実の一つの問題性を孕んで、我々宗侶の前に横わっていることは確かである。変らぬにしたならば指方立相は、いかに説かれるか。往生とは文字通りに理解せらるべきか。近来、宗教新聞の多くに論ぜられる点も、実に、宗義の現代性いかんというにある。

二

こうした風潮の中で、最近、二つの論集が出刊された。法然上人研究会の雑誌「往生」と知恩院布教師会刊の「往生について」の二つである。そしてこれを並べてみると、いかにもそれぞれの性格を鮮明していることが知られて興味深いところであるが、そのいうところは、往生を以って本来的自己に帰るとする立場と、「信」を根底として平常念仏をするとともに往生ありとする見方とのようにうけとられる。

しかも、諸論文の全体を通じていえることは、このような立派な解釈が出来ることは分っているが、それをそのようにうけとっていない、現実大衆の信仰のあり方に対して、一顧も与えていないということである。折角、宗祖によって、一般庶民の胸に協鳴する仏教として立てられたわが宗旨が、再びかつての山門仏教にみられる如き、高遠深重な理論の仏教に逆戻りしたかの感がするのである。実をいっ

て、これ等の論文をよんで、往生とはどういうことかということは、どおやら「分った」けれども、これで往生「出来る」とはいえないようである。

仏教を求める人々は、「分る」仏教ではなしに、「出来る」仏教を求めているのである。宗祖は誰にでも「出来る」お念仏を与えて下さったのである。すぐれた宗教心理学者ウィリアム・ジェームズは人間の知識には「……についての知識」と「そのものに即しての知識」とがある。「……についての知識」はいくら積み重ねても、それはそれだけのことに止まる。宗教の世界において、真に意義あるのは「そのものに即しての知識」であるといった意味のことをいっている。

どうも近來は、教育の機会均等が行きわたったせい、
「ものしり」がふえてしまった。「往生」について、「淨土」について、「念仏」について、「ついで」の知識のみ巷に溢れている。所謂、意識過剰ではなく「知識過剰」である。すぎたるは及ばざるが如しで、「について」の知識も、こう過剰になると知識ノイローゼになってしまう。教
学大会のシンポジウムで、けんけんがくがくの論議の出たのもそのせいであろう。

三

日本の仏教の歴史をふりかえってみてすぐ気のつくこと

は、信仰が新しく甦えるのは、きまって、仏教が大衆の手に戻ったときである。念仏の流布も、題目の流行も、禪の普及も、すべてそれを支えてくれたのは、大衆の素直おな信仰心であった。そのものズバリの、かけ価なしの信仰そのものであった。

そして、そうした時代は、いつもギリギリの追いつめられた時代意識に溢れた時代であって、他に生きようのない生活のすべを、み仏の大いなる慈悲に没入せしめて行なったのである。逆にいうならば、宗祖を始めとして、仏教の歴史の上に輝いている各祖師達は、大衆のやる瀬ない心情を適確にキャッチして、これを信仰の門へと導かれたのである。

論義の時代はもうすぎ去った。二十世紀もすでに曲り角に來ている。坐って喋る時代ではない。アイクもニキタも、自ら大空を駆けまわっているのである。

すべからく、仏者は大衆の中に入り、大衆の心の方向をつかみ、大衆の胸に念仏を返えしてやらねばならない。

大衆は、自分で「宗教しよう」としている。今までのように、坊さんにたのんでお経を上げてもらうのではなしに、自分が木魚を叩いて、自分で念仏を唱えたがっているのである。「について」の教学も、宗学も、まず大衆のこうした志向から再出発すべきである。そう努力して行きたい。

(大正大学教授)



称名一途に

三 井 高 陽

毎号本誌を御贈り頂き隅から隅まで有難く拝読させて頂きます私としては、このような良い布教誌がもつと広く一冊でも多く世の方々に読んで頂きたいと常々思っています。

私の家で何百年代々奉拝して居ります準胝観世音菩薩様の御尊像が、御縁がありまして、深光寺に奉納させて頂くことが出来まして、毎年十一月十七日に皆様と共に御法要を営むことが出来ます事は私にとって非常な喜びで御座います。其折に御集りになった篤信の皆様は御話を致しますことも楽しい事でありまして。勿論私は御法話を致す資格も、学問もなく、又俗悪の一凡夫にすぎません。ただ御集りの方々とお話を交す

ことにより、私自身を省み、又皆様と共に如来の御前で一時たりとも淨らかな気持ちにさせて頂くことが出来ることは誠に有難いことと思つて居ります。

昨年の十一月十七日にも皆様に御挨拶いたしました感想を申し述べました処、その話は是非本誌にも書いて欲しいとの事で御座いますので、多くの篤学の諸先師方の御話の載つて居ります本誌の中に伍することは誠に身の程知らずと申すべきではありますが一隅を拝借して書かせて頂く次第であります。

昨年は私にとりまして非常に悲しい年でありまして、私の最も愛し、敬っている老母が五月十七日の暁方他界いたしました。一昨年末に医師から母の生命は約三



カ月位しかないと宣告された時には、私は愕然といたしまして、約一週間食事ものどを通らぬ位悲嘆の底に沈んでしまいました。

母はたった一人の息子の私と私の妹、この二人だけを頼りともし、生きている中には私共二人のことだけがいつも念頭にあって、幼稚園、小学校に通っている時代の童子童女と同じように、少し帰りが遅ければ案じ寒ければ心配し、疲れてはいないか、体は大丈夫かと私共が母を案ずるより以上に年を取っても案じてくれました。病が大分重く、死を覚悟するに及んで、病床を見舞った某病院の牧師さんや看護婦長さんに私には私を大切にしてくれる息子と娘があるので幸ですと苦しい息の下から度々いったときいて、充分孝養もつくせず母を楽しませることも出来なかったわれわれ兄妹をかくまで愛して頼ってくれたのかと誠に愧しい思をしたのでありますが、

己れ生ある間は、子の身に代らんことを念ひ、己れ死に去りて後には子の身を護らんことを願ふ、是の如きの恩徳如何にして報すべき（父母恩重経）

とあります通りで、亡き母のことを思うにつけ、すまない気がいたします。

母は平素仏壇で礼拝いたしお経を上げまして、最後に金剛陀羅尼経を必ず誦します。常々これを上げて息子が健康で社会活動が出来るようにと念じているといつて居りました。母自身のことよりも息子ということが一番念頭にあったようであります。

大分病が進み最早自分でも助からないと覚悟したらしく、或日病院へ見舞に参りました時、もう病氣はどうの、薬はどうのということとは全く口にしません。衰えた視力はテレビを見る気力もないようでありましたが、フト窓辺に集って来た二三の雀を見て、「陽ちゃん、可愛い鳥が来ているよ、御覧なさい」といって指さしました。毎日母は自分の室の前に、パン屑など撒いて集ってくる雀の可愛らしい姿を温顔で眺めていました、雀も毎朝御馳走の催促をしてチュウチュウと啼いて集ります。こうして自分の宅でない病院の窓辺にも来る雀がどんなに可愛かったのでしょうか。そしてお見舞の花と鳥だけが静に人生の終りに追って行く母にとっての慰みであり、淡々たる心境の裡に静かに如来の御来迎を待つといった気持であったように察せら



れました。

亡ります僅か四日前、もう視力も薄く又多くは昏々と睡っていた母が突然私の名をよび、はっきりと遺言をいたしました。どうしてこんなに意識がはっきりしたのか驚きました。母は目に涙をたたえ、力なき手で涙をふきつつはっきりと遺品分けを細々と述べ、もう私のいうことはない、お見舞に頂いたお花を見せてくれと申し、私と妹達で花を目のそばに一つ一つ近寄せて見せましたが、ああ美しい花だと眺めて喜び、了つてからは又深い睡に入りましてそれから四日目の暁方静かに息を引取りました。母の目には美しい花園に、可愛い小鳥の戯れる楽園がうったことと思います。

平常も仏様に御任せしていると常々申して居りました。発病いたします二カ月前には京都の菩提寺の歴代の先祖の墓にも参り、宇治の平等院鳳凰堂にも参り元気で帰京いたしましたが、これが一生の最後の先祖のお墓参りだと非常に喜び、鹿ヶ谷の法然院でのお施餓鬼にも楽しみにしてお参りいたしました。遺言にも自分の身につけたものや小遣銭の残ったものを宅の縁故の尼寺へこれとこれを奉納して欲しい、里の岩手県一ノ関の先祖の菩提寺の御墓の修理から法要まで細々と

希望を述べてなくなりました。

こうした八十年の生涯の終りに際して静かに瞑目することが出来たことは、平素の望みに叶ったことでありますが、全く如来様の大きい御慈愛の御手に抱かれたことに他ならぬと信じます。病床に在って仏壇に額くことが出来なくなっても毎朝枕頭に置いて御経本は必ず開いて黙誦し、最後まで離さずに居りましたあの姿を思い浮べ、尚一層に私共は大きな御光の有難さを身を以て感じていた母の姿が尊く感ぜられるのであります。

母がこうした生涯を送れたことも、故高楠順次郎先生から仏教の御講話を度々承って居ったことにも大きい素因があったことと存じます、もう現前に母は居りませんが遺された私共は母の霊に対して報ゆることは、ただ一途に称名の行を通じてのみであると存じます。これが母への報恩であり、又父祖への報恩の行であると思つて居ります。

×

×

×

×

×

×

畢^{ひつ}

竟^{きよう}

依^え

池の水ひとのこころに似たりけり
にこりすむことさだめなければ。

——法然上人御歌——



石原 宥 政

私は本年数え五十一歳になる真言宗所属の僧であり、正規の寺というものに住せず、滝野川の一隅に不動堂を営んでいる。私には五人の子供がおり、長男はキリスト教系の玉川学園高等部を出て、昨年上野の芸大作曲科を受験し、第三次まで行きながら、コオルユウブンゲンがうまくゆかなくつて落ち、今春を目差して勉強している。しかし、私は、貧しい陋巷の中にくすぶつて、毎夜のように板橋税務署の傍に手相見に出、また、昼は仏の読経、虫封じ、六算除けなどとして努力しているが、未だ息子にピアノも買つてやれず、そ

れどころか、昨年の春五万円に彼に買つてやったオルガンも、頭金毫万円だけ私が支払い、あと月々二千円宛の月賦は、息子のオルガン教授や、ピアノ、テレビへの出演などでまかなっている状態なのだ

息子の下は四人とも娘で、それでも都立豊島高校の三年に在学している長女は、一流銀行の就職に合格したので、まあまあと、やっとな一人働いてくれることになったが、それにしても、その下三人の娘の教育も、長男の教育も残っているのである。

私は、そうした五人の子供や、妻をも教化

しない。自分の法要に伺っている家に行つても、浄土の教えを人々に勧めようとはしないし、勿論、大日如来の信仰や、即身成仏の教えも、力説しないのである。そして、私は、「お前は仏教をどう考えているのだ」と言われれば、私の内心においては、矢張り釈尊の佛（おもかげ）のハッキリ泌み出ている初期阿含部の經典や、法句經・遺教經の如き、單刀直入な理窟をもちまわらず、齒に衣を着せぬ、仏陀の体温さえ感じられる教説が好きだ——と答えざるを得ない。居坐つて、正面切つて問詰されれば、そう答えざるを得ぬ私なのであるが、その私は信者の家に行つて、その家にもめ事や、商売の不振や、私自身に対し不快なことでもあると、私は、こころひそかに念仏を唱えるのである。

私にとって、そうした、血のほどばしるような、自害々彼や、もろもろの不条理——たとえば、夫婦喧嘩や、重税や、生活苦の反映や、それらからのアオリのように、読経の布施まで渋りがちに見え、仏教を白眼視する……そんなことをおもんばかりと、私は、心の父に縋るように、南無阿彌陀仏に縋がらずに

はいられないのである。

私はそうした「人世の底」をのぞかせられるような場合には、全く、あわてたように、彼の嬰兒が母の乳房を本能的に恋うるように、至心な気持になって、仏名を念じ、仏に縋るのである。

それは、私の過去というものが、その素地の、純白な時代に、浄土の教えを聴き、その「曠劫来流転」という、人間実存の「機」に対する「深信」を、刻み込まれ、染められてしまっているからだとおもう。

——遙かなる過去のことだが、私は教え十七・八歳の大正の末年に、京都の今熊野の豆腐店に働いている兄をたよって、東京を發った。別に京都へ行つて、何かしようという目的があったのではなく、ただ、兄が好きだったし、そして、兄のいる京都という旧都に夢のような憧れをもっていたからだだった。それで兄の居る店で、矢張り兄と同じように、豆腐の製造を手伝ったり、あの妙法院の先の「山科道」の東山につらなる長い坂などを、重い豆腐の桶をかついで売り歩いた。そんな無理が原因して、二カ月そこそこで肋膜炎にな

り、私は、兄ともども、群馬県の郷里へ帰ったのであった。兄は長い道中、私の軀を無理させまいとして、二等車に乗せたり、また郷里〇町の駅からは、私だけ人力車に乗せてくれるといった心の遣いようだった。兄は私を両親の許におくと、ひとり上京して行つたが、私は一カ月ほど経つうちに、全快して、今度は單身、京都の豆腐屋へ行った。絵の好きな私は、日本画家の家に書生にはいり、絵の勉強をするつもりで、豆腐の行商の傍、その機会を狙っていた。

その時、私の前にひらけたのは、絵に対する道ではなくて、如来の御名号に通じる道だったのだ。

というのは、東山の智積院の裏に四・五十軒の散在した家があった。その一軒に山口さこのという、主人は西本願へ勤めており、息子さんは竜谷大学の仏教科に在学している父子があり、先づ、その大学生が、

「君。絵書きになるなんて、大変だよ。すぐれた才能と、金とが揃っていても、皆、途中で挫折してしまうのだよ。それより、大阪の先の、浜寺の西法寺の御住職が、役僧を求め

ているから、君、坊さんになりなさい。よく仕込んで下さるよ。あの御院さんは、少年保護司もしておられる、やさしいお方だ」と、勧めてくれた。

息子さんばかりでなく、主人も、奥さんも、やさしく説いてくれた。

「でも、私は、学問もない方ですから」というと、息子さんは、
「それだから、これから仕込んでもらうのだよ」と、私を激励した。

意を決した私は、五月下旬の、うっとうしい雨の降る日、行季を担いで京都駅から乗車して、浜寺の西法寺へ行った。

住職は口髭を蓄えた、けい眼の人であったが、若い時から苦学して来た人で、話してみると、温かい人柄が、私の感じ易い心を抱いてくれるようだった。

私は、正信偈や、阿弥陀經を覚え、大經や觀經へと、段々習っていったが、その私が入寺してから、一カ月ぐらい経った時、京都の本山から、某師という特派布教師が派遣されて来た。私は、それこそ、立錫の余地のないように混んだ本堂の廊下に立って、善導大師

の「機の深信」についての説教を聴いた。

私は、はじめて「仏教とは、こういうものなのか。それにしても、これまでの自分の生き方は、無道で、自害々彼で、善業というものは、全く薄少であったのだ。オレという奴は、なんたる馬鹿な、勝手者だったか」と、はじめて、深い感動を覚えた。私は、親鸞という人間像を知り、そして、たしか大谷尊由師の「法然上人」という著書を読んで、早く少年時代から怨讐の兇刃によって、父を失うという悲運を味った、法然上人をも知ったのだった。

私は、それから、準備勉強に数カ月をかけて、大阪の津村別院の中にある、夜間の仏教学院の第一部に入学した。ところが、その年の夏、私は、その頃は堺の寺に移っていたが、その寺の檀家の娘さんの肩に手を触れたことから、大きな声を出され、それが却って「自己嫌悪」を増させ、私は、仏教学院と、真宗の教えとを捨てて、群馬県の父の家に帰ってしまったのであった。

だが、「三密加持・速疾顕」という、理論主義の教義は、私を救ったろうか？。いや、私

の宗教的情操に契合したであろうか……。

私は、その事の可否を索め、勝劣を問う考へはない。ただ、私は、「生きる必要と、そして、おかれている生活態勢の中で」易を求められて観る時など、やはり、心に仏に縋り、六字の名号で、不純を洗ってもらうように、笹竹を捻じ、算木をひねるのである。

私は、このような「我儘で、自由な立場から、親鸞上人や、法然上人の御著作を味っている」そして、それが、私なりの信仰なのである……。

それにしても、私は、法然上人の左のお言葉を、矢張り、私なりに、先入観のない、自由な気持で味うのである。

『ひじりて申されずば、女をもうけて申すべし、妻をまうけて申されずばひじりて申すべし。住所にて申されずば、流行して申すべし。流行して申されずば、家にゐて申すべし。自力の衣食にて申されずば、他人にたすけられて申すべし。他人に助けられて申されずば、自力の衣食にて申すべし』

〃十二月四日善導大師月並御命日に〃

我が身をつねって

ある家で目のみえないお姑さんを、嫁さんがひどく邪険にあつかっていて、お姑さんが御飯をこぼすからきたないと、木の空箱に何でも放りこんで食べさせていた。

ところが、あるとき、嫁さんの子供が木屑をあつめて釘をうっているのので、嫁さんが、

「坊や、何にしてるの？」

と聞くと、坊やは、

「お母さんがおばあちゃんになってからた食べさせる箱を作ってるの。」

と答えた。嫁さんはおどろき、それからすっかり改心したという。

むかしの鳩翁道話にでもあるような話であるが、しかし、いささか考えさせられるものがあつた。

幼い子供たちが、生後三カ年ほどにおぼえることが実に多く、まったく大切な時期であるということである。

成人して大学で学ぶ三年よりも、おおく覚えるといわれている。



惚れ惚れと念仏申そう

太田 千秋

阿弥陀仏を唱えればそれでよい。そこに念仏宗の宗教としての大衆性がある。

○
仏教には天台、真言、禪の様な聖道門と浄土、浄土真宗の様な南無阿弥陀仏を唱える念仏門とがあるが、いずれも行きつく山の頂上というものは同じである。

禪宗の様に、座禪を通しての悟りという如き、さながらロッククライミングの様な方法で山の頂上を征服するのも、山道を辿つて山のすそを廻りながら頂へ達する浄土門にしても、最後に到達するところは皆んな同じ訳である。

ロッククライミングにはロープとかザイルとかハンマーとか種々と準備が必要だが、念仏門にあつては山道を歩くのだから、大げさな道具立ては何一ついらぬ。只一向に南無

○
南無阿弥陀仏と念仏を唱えれば、阿弥陀仏によつて私達が救われるのではない。阿弥陀仏が私達を救うのである。私達が救われたいと思う心より、阿弥陀仏が私達を救いたいと思志しているのである。私達に救われる資格がないが故に、阿弥陀仏が私達を救つて下さるのである。

そして、その念仏は法然上人のよき継承者であつた親鸞上人が申しておる様に、どんな悪いことをした人でも、いやむしろ悪いことをした人なるが故にこれを済度しようとする。「善人すら往生するのだ、それなのに、

新編百喻経 (二)

先入観

Mは、先ごろまでは、真宗の信者だつた。それが知人から、新興宗教の、或る会をすすめられ、それからすっかり熱心になり、本部のいうままに、神柵・仏壇等も、取りはずして、ひたすら〇〇様だけを、祀っている。

住職も、何回か出かけて、話し込んだが、「私たちの信じるものは、これ以外にありません」

といって聞き入れようとしないので、残念ながら引きさがった。愚信が正信を追う！

敗北心

私が、学生のころ、アルバイトに、郵便局の、年賀郵便の臨時雇に、行ったことがあつた。十二月の末から、一月の五日までだったが、何十万と持込まれ、山に積まれた、郵便物を見ると、「是は大へんだ」と思うと、我々臨時仲間、手が出ない。ところが、職員たちは、ずんずんスタン

なぜ悪人が往生しないことがあるのか」(歎異抄)という。此処に念仏宗の大眼目がある。

物事を二つに、善と悪とに分けて、善のみを称揚して、悪を追求していくものならば、それは道德としては立派なものであっても、宗教としては全く価値のないものであろう。

少くとも、善と悪とを並べて置いて、これをたてに切つてこないところに、浄土門の宗教としての素晴らしさと同時に厳しさを見出すのである。

○

南無阿弥陀仏と云うことは死んだ人に対して申すということよりも、諸々の経典と同じく、生きている人のこの世に生きていく上の心の拠り処を示しているものである。

経典は生きている間に読み、これを自分の内に取り入れ、毎日を積極的に、有意義に生きることに真の意味がある。

南無阿弥陀仏を唱えることもこれに外ならない。「念仏を唱えれば極楽往生をするというが、それに間違いないか」と問われたのに対して「良き人(法然上人)の仰せであるか

ら、よも間違いや、嘘はない事と思うが、若し南無阿弥陀仏と唱えて極楽往生が出来なくても、それを後悔する程、立派な行いをしていく人間は一人だつていないのではないか」と親鸞は答えている。

死後の世界は知らない。只現世に於ては念仏を唱へることによって、弥陀の誓願に救けられているという大きな安心が生活の強い支えになるのであつて、この問答から浄土門の宗教の物すごい迄の鋭さを感じとる。

○

念仏に徹した人は五月の空の様に明るいと いわれる、只管、南無阿弥陀仏と一文不知の輩となつて惣れ惣れと念仏を申すことを通して安心を得たいものである。

草の庵に就ても

さめても申すこと

なむあみだぶつ、なむあみだぶつ

—良 寛—

(森永製菓仙台工場勤務)

プを押し(その頃は、今のよう機械ではなかった)。ほとんど区分して、山を減らし ていくのだ。仕事でも、勉強でも、兎に角 見ていないで、手をつけることだ、仏の教 えは、実際に行うことで、聞いているだけでは判らない。

どう せ……

私の近所の、Tさんの妻女は、少々頭が ……ではなからうか? という人だ。

先日も、新しい茶碗を、ゴミ箱へ、たた きつけて、捨てているので、

「どうしました」ときいたら、

「夫婦茶碗なのですが、さっき私の分を 落してわってしまつたんですヨ、揃いの 片方がわれたので、縁起が悪いから、う ちの人の分も、すててしまつたんです」 というのだ。

夫婦の愛情と考えれば、なかなかしゃれ た細君だが、考え方によると

「どうせ一つがかけたんだからこれもついでだ」という、犯罪者の、累犯心理と同じ にも、考えられて、恐しいことだ。

(伊東挙位)



釈尊の生涯 (七)

佐藤 密雄

六、仏陀の晩年

提婆の分派 仏陀の晩年に、いところであり、弟子であった提婆は、仏陀のもとから同志とともに分かれて、別の教団を組織した。これは仏陀に対する提婆の反逆事件としてつたえられている。

それは、王舎城でピンピサーラ王の子、アチャータサットが、政変をおこして父王から政権を奪いとったのに呼応して、提婆もまた、仏教の教主としての地位をえようとしたことが原因であるといわれる。このような国の政変と、関係があったかどうかは定めがたいが、提婆は、老年になられた仏

陀にかわって、自分が直接にサンガの指導にあたり、サンガの生活を一層厳粛なものにしようとしたことは事実である。

おそらく、仏教々団が、王や実業家たちの支持を受けて大きくなるとともに、奉納や供養なども多く、また広大な精舎を各地にもつようになった。そのため、比丘たちの日常の生活も、出家生活の原則である乞食をして生きることや、棄てたものを身にまとして過すようなことが、実質的に失われていった。そのため、それに対する社会的な批判もようやくきびしくなり、これを憂えて、改革運動があらわれたのである。

しかし、この提婆の改革意見は、現状に対してはあまりに

も厳しいものであった。これは仏教サンガにとっても、これを支持する信者にとっても、実践することが不可能なことであつて、しかもその改革内容が、仏教に対立する嚴肅派のチャイナ教の出家規則に準ずるものであつたため、仏陀によつて全面的に拒否されることとなつたのである。

そこで、提婆は、同志五百人とともに分派して別な教団をつくるに至つたのである。したがつて、提婆は教理上のあらそいで分かれたのではなく、生活態度についての意見の相違からであつて、教えとしては、いぜんとして、仏陀の説かれた法を信奉したものとみられる。

提婆は、仏陀の血族であり、人望もあつたといふことは、五百人の同志がかれに従つたことでも知られるが、おそろく、その主張にしたがつて嚴重な教団生活をいとなんだであらうし、社会的にも相当の支持を受けたようである。提婆が、仏陀に提出した改革意見は、出家比丘の生活の仕方について、五カ条から成っているのである。

(一)、生活を林のなかに住すべきもので、乞食以外に、林や町に住すべきではない。(二)、生活を乞食して暮すべきであつて、特定の家庭などの請待をうけて食すべきではない。(三)、生活を糞掃衣(一般人のすてた衣料でつくつた衣類)を用いるべきであつて、信者などにつくらせた新衣を着るべきでは

ない。(四)、生涯樹下に坐すべきであつて、屋内に入るべきではない。(五)、生活において魚肉を食しない。

これらの五カ条は、だいたい当的の出家生活の原則であるが、第五の魚肉の問題は、当時のチャイナ教の徹底した不殺生主義にもとづくものとみられる。そこで、この五カ条に対する仏陀のこたえは

(一)、もし欲せば常時林住すべく、もし欲せば林邑に住すべし、もし欲せば常時乞食すべし。

(二)、もし欲せば請食(招待者の提供する食)を受くべし。

(三)、もし欲せば常時糞掃衣を着すべく、もし欲せば居士衣(信者の寄付する衣)を着すべし。

(四)、我れは八月樹下に坐臥するを許す。

(五)、生きた姿を見ず、それを聞かず、あるいは、それと擬わしくないものならば、魚肉は食すことを許す。

というものであつた。

これは、いうまでもなく、出家者の生活の原則は否定せずにまもるべきであるが、信者の請待する食事や寄付された衣料は、用いることはさしつかえないとされる。また、奉納された精舎があれば、そこで坐臥するもよく、魚肉なども、とくに自分のために生きたものを殺したということ、見たり、聞いたり、凝ったりしないかぎり、これを食べてもよ

いというのである。

サンガとしては、比丘の生活の正しいことは第一であるが、また、信者の施をうけることも、信者の仏道を増上するためには、これも一種の義務である。サンガ信者を懲罰するときは、覆鉢といって供養や奉納物を受けとらないと宣言することがある。これでもわかるように、信者の供養や施をうけることは、信者に対する一種の義務にちかいものがあるのだ、この点からも、提婆の急な改革意見が容易にうけいれがたいものがあつたのであろう。

当時、仏教と対照的な厳肅な生活を強調するチャイナ教の出家生活が、提婆に極端に出家生活の原則をまもる改革意見を考えさせたものとおもわれる。また、分派独立した提婆の教団からは「仏陀の教団は栄耀の生活をなす」と批判されたとつたえられる。

しかし、仏陀としては、出家の生活形式の嚴重さが目的でも理想でもなく、悟りへの仏道が重要なのであつた。したがって、出家の生活に堪えられないものは、一般の生活にかえることも認められたのであるから、提婆の意見のように、ただ出家生活の原則を実行することのみに努力して、仏道への思念をわすれて、生活形式を仏道とするようなことには賛成しがたいとされたのである。

釈迦族の滅亡 提婆とその一派の独立は、仏陀の晩年の不幸の一つであつたが、いま一つ、釈迦族の滅亡ということがあつた。

釈迦族の国が、すでに独立性をうしなつてコーサラ国の勢力下にあつたことは、仏陀の生れられたころからであつた。このことは、釈尊の出家の動機の一つとも考えられる。

しかし、成道五年目に、スダッタ（須達多）長者の努力でコーサラ首府舎衛城に祇園精舎ができて、仏陀がコーサラへ開教されるにおよんで、コーサラ国ハシノク王も仏陀に帰依するにいたつた。また、釈迦族からも一族の美女を王の第一夫人として嫁ぐこともあつて、釈迦族の王家はいちおうの安定をえていたのである。

しかし、がんらい釈迦族の人たちは、血統のうえでは釈迦一族がコーサラ王家の主流であつて、現在の王家は傍流のものであるとして、血統をはこる態度があつた。そのうえ、釈迦族からその第一夫人としてはいった美女も、その母方の血統がかならずしもよくなかつた点があつたとして、完全に友好的ではなかつたようである。

このような不安が、釈迦族の男子をして相いつづいて出家し、仏陀のサンガへ加わらせたともみられる。釈迦族を滅したのは、釈迦族出身のハシノク王の第一夫人の子ビルリ王で

ある。この王は、父王が祇園精舎で仏教の説教をうけているあいだに、政変をおこして王位につき、兄のギダ太子をも殺し、父王も王舎城外にのがれて亡くなった。さらに、ビルリ王はカピラ城を征めて五百人の釈迦族の人びとを虐殺して、ここに釈迦族は完全に滅亡したのである。

しかし、まもなく王も非業の最後をとげて、王の血統も絶えたといったえられる。

仏陀の入滅 仏陀は、きわめて健康で、ほとんど病気をされたことがなかったようである。八十才に達せられた仏陀は、王舎城と舎衛城との中間にあるベーサ



リ（毘舍離）のちかくで雨期を安居された。

このときに、背の痛む病氣となられ、余命のすくないことを感じられた。伝えるところによると、仏陀が入滅されたこのことであるが、仏陀がちかく入滅することを語られたときに、阿難はそれを聞いたまま、いますこし仏陀に在世されるように願わなかったということ、他の弟子たちから非難されたことがあった。もちろん、これは弟子たちの間に、仏陀ほどのかたは、自分の寿命を短かくすることも長くすること、自由であると信じられていたためである。現在につたえられる、仏陀の入滅を記した経典は、このような考え方をもっていた弟子の記憶をつづったものであるが、それには、仏陀は、その生涯において、なすべき業をなしえたので、いまや入滅すべきであるとして、寿命をおえられたのであるとしている。

仏陀は、背の痛みのあったのち、ベーサリから西北のクシナーラ（拘尸那羅）へむかって伝道に旅たたれた。その途中、鍛工のチュンダ（純陀）の招たいで食をうけられた。チュンダは、かねがね仏陀を食事に招たいしうと考えていたが果さなかったもので、このときは、その目的を果せるのをよるこび、最高の珍味を調とのえて仏陀をもてなしたのである。チュンダが仏陀に供えた珍味の材料については、それが

イノシシの乾肉であつたか、あるいはキノコの乾したものかは不明である。

これをうけた仏陀は、一口食すると、これは最高の珍味で仏陀だけが食するもので、これを仏陀以外の家人にも仏弟子にも供してはならないとされた。そして、残ったものはぜんぶ地を掘って埋められたという。おそらく、その食物中に毒性を感じられた仏陀は、類を他におよぼすのをおそれて、そのような処置を命ぜられたものと考えられる。

チュンダのそなえる食をすまされた仏陀は、クシナーラにむかつて進まれたが、いくどかはげしい下痢にみまわれた。渴をうったえられて、阿難はしばしば水をもとめて仏陀にさしあげた。

伝えるところによると、仏陀の水をもとめて河にいくと、いましも百台もの車が河を横切ったところで、水は濁っていたので、阿難は当惑したが、まさに水を汲もうとすると、河の水はたちまち澄んで、清水を仏陀に献ずることができたといわれる。

仏陀は、病いにあえぎつつクシナーラの沙羅樹の並木のところに達すると、阿難に臥床をしつらえさせ、きよらかな流れに汚れた体をきよめ、新衣をつけて臥床された。急をきいて附近の人びとがきたり、その近かくを伝道していた弟子た

ちもあつまつた。そのとき、道をもとめておしえを乞うた、スバツダ（須跋陀）というバラモン行者にたいして教えを説きみちびかれた。かれが仏陀の最後の弟子となつたのである。

仏陀は、その夜、（二月十五日 涅槃会）中夜寂然として音なきところに、入滅され、八十の生涯をしずかに閉じられたのである。

仏陀の葬送は、入滅に立ち会つた阿難とアヌルダの二弟子がクシナーラの人びとをさしずして準備し、長老弟子として信望あつた大迦葉が到着するのを待っておこなわれ火葬に付された。

遺骨は八分して、仏陀に関係のあつたところの人びとに分けられることとなつたが、要求がおおく、さらに遺骨をいれた瓶と灰とをくわえて十カ処に分けることとなつた。これが仏陀の十塔であり、仏教における塔崇拜のはじまりである。こののち、仏陀の誕生と成道と初転法輪と入滅とを四大事として、ここにも塔を建立し、さきの十塔とともに、仏教徒巡拝の聖地となるにいたつたのである。

（大正大学 仏教学部長）



バンザイ

——「パイナップル部隊のこと」——

武田 秀 郷

—

「……渡辺は一生懸命な動作で、なにか上衣のポケットのなかのものを取りだそうとしていたが、とりだすだけの力がありそうにもなかった。そこで、私が手をポケットにさしこんでみると、紙入れがでてきた。私は渡辺が力なく指を動かしているしぐさの意味がわかったので、紙入れから「オオモリ」と、マッチ綴りぐらゐの大きさに『私は仏教徒です』と書いた紙がはさんであるプラス

チック製の品物を取り出して、手ににぎらせてやった。渡辺の目が、私に感謝して、指はしっかりと、その信仰のうえにとざされ、手は胸に持ちあげられた。私は、その家族の写真と、それからたぶんガール・フレンドであろう。きりょうのいい娘の写真を目の前に持って行ってみせてやった。目を閉じたとき、渡辺はまだ、ほほ笑んでいた。胸の上の手が、ぐったりとなって、片脇にすべり、もはや用のなくなった信仰の品物がころがり落ちた」

これは、ハワイでベストセラーになり、最

近、邦訳され、映画にもなった「パイナップル部隊」の一節である。

「パイナップル」というのは、ハワイの日本人二世で構成されている、アメリカの部隊のことで、朝鮮戦争を舞台に、その勇名を響かせた。先には、四四二部隊というのが、イタリア戦線で勇猛を歌われたが、パイナップルも、色々の東洋人の二世——日本人が可成り多いらしい——の勇敢さで有名になったようである。

二

ハワイはいうまでもなく、日本にとっては非常に親しみのあるところで、ここには、早くから日本仏教の各宗が布教所を設け、仏教の色彩の濃い土地と知られている。

「パイナップル部隊」に出て来る日本人の二世達も、おばあさんや両親のおともをして、仏教の開教所にお詣りした連中も多いことであつたろう。そうした中の一人が、朝鮮戦線で、敵弾をうけて倒れた時の情景が物語られているのである。「私は仏教徒です」、こういった標識を胸にして、静かに、戦場の露と消えて行った若い生命は、まだこのほかに数

限りなくあつたであろう。

仏教のことがいろいろに論じられている。

「此頃の仏教は死んでいる」とか、「坊さん達は職業化している」とか。批判の大多数は非難に類する。事実そうであるかも知れない。しかし、そうした論議は、すべて、ストープを囲み、お茶を前にして、足を組んで行われているものが多い。いわば、「仏教」というもの、更には「信仰」というものを、丁度、ギヤラリーに飾られたアブストラクトの芸術品のように、観賞の対象とし、論議のさかなとしていゝのではあるまいか。

三

「パイナップル部隊」に語られている、「私は仏教徒です」という宣言は、そんな、なまやさしいものではない。自分のいのちを、何か知らぬが国連憲章で定められた、「正義」のために捧げた、一人の、いくた春秋を約束された若い生命をギセイとしての、文字通り、血にまみれた宣言なのである。

仏教を含めて、宗教というものは、このよ

である。これによって、自らの死を、永遠なるものと諦念し得る。そこに、真実の信仰があるのだ。職業宗教家の、身は血の匂いをせぬところに置いての講壇論議はききあきた。もっと、血みどろな、運命との戦いの中に、信仰が語られないものだろうか。

四

日本人の、フテブテしさを物語った、更にもう一節を引用してみよう。

「わが方の兵隊は、なんにでも、あらゆるものに、とくに動くものには、なんにでも銃火をあびせていた。けたたましい銃声にまじって、苦悶に満ちたうめき声や、悲鳴がきこえ、私たちは、それが相手の軍の人間の出す声であつてほしいと望んだ。

それから「バンザイ」と叫ぶ声がきこえ、私たちの小隊は、いまでは恐怖状態の赤どものなかに突つこんで行った。たちまち、誰も彼もが喚声をあげ、狂人のように喚いて、前に突進し、突つこみながら、悲鳴をあげている人影に銃火をあびせ、灌木の茂みをつき刺していた。マイルズ中尉とアポストリ中尉ですが、部下を督励しながら、「バンザイ、バ

ンザイ』と叫んでいるのが聞えた。

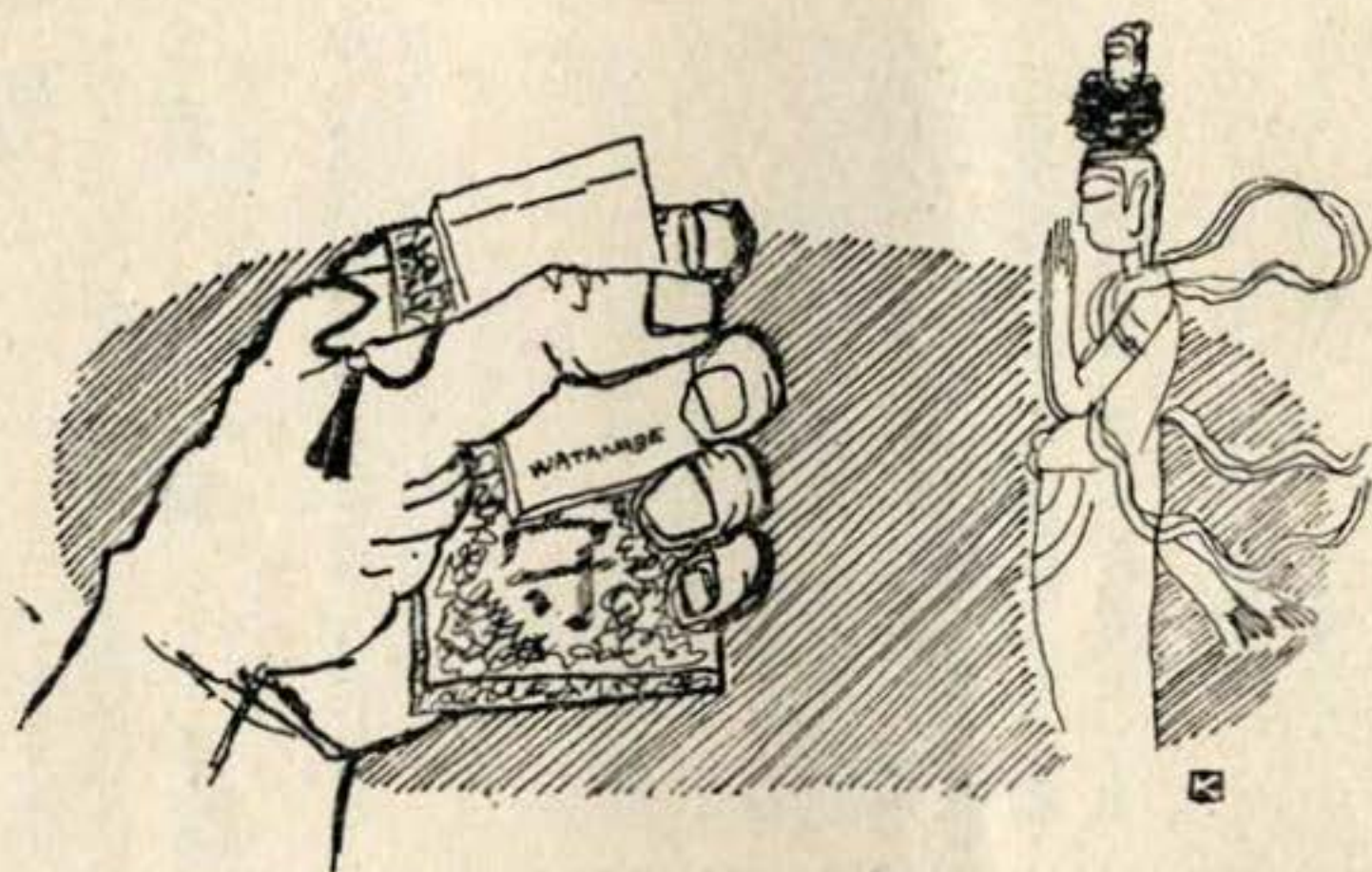
伊佐と私は、その喚声にいく分つりこまれ
て『バンザイ、バンザイ』と叫び、カービン
銃を一方の手に、片方の手には救急箱を抱え
て、そのあとを追って突進していた。……」

やがて、戦闘が終り、捕えた捕虜の中か
ら、中国将校一名と兵二名、朝鮮将校を一
名、訊問のために選び出した。

「中国将校は、日本軍隊は、いつ国連軍に加
わって戦うようになったのかとたずね、戦争
捕虜としての権利をくどくどと説きたててい
た。

やっとその将校が黙ると、チンとチャン、
キムとリムが、彼らはアメリカ軍の捕虜であ
り、わが方の中隊の兵は全部アメリカ人だと
教えた。

ふたりの将校はどちらも腑に落ちかねたよ
うすで、いったい、あの『バンザイ』はどう
したことが知りたがった。中国将校は、わが
方の部隊を日本軍だと考えたことを指摘し、
おやじとその部下たちが、彼らを降伏させる
ために、不正な、卑劣な方法（バンザイと叫
んだこと）を使ったと非難した。



中共兵の多くのものは、前の戦争で、日本
軍にさんざんばらいだためつけられて、相手が
日本軍だと、降参するよりほか手はないと思
いこんでいたらしい。相手がニツプス（日本

兵）だと戦う意志をなくし、おまけに、手
も足も出なくなるらしかった。」

「バンザイ」が日本兵のシンボルであり、
その声をきくと、体中の力がぬけてしまふ
という。実に、おそろしい魔力である。

五

日本兵が勇敢だったことは確かである。
いまさら、その勇敢さをとやかくいうので
はない。ただ、ここでいいたいことは、日
本兵が「バンザイ」を叫んで突撃して行
く、その背後に、何か、いい知れぬ、目に
みえぬ、巨大な力が作用しているというこ
とである。むづかしい論議はぬきにして、
私は、そこに、「私は仏教徒です」という
標識のあることを指摘したい。

よしにつけ、あしきにつけ、一つの信仰
を持つということは、人間をこの上なく、
勇敢にするという、このことだけを「パイ
ナップル部隊」から読みとったのである。

身

辺

雑

記

(二)

見えぬ世界

森

赫

子

いつだったか、私はある知人から貴女は本当は目が見えるのではないかと聞かれた。

それというのも、実は私の家の窓から真正面に富士が見えるとその人に教えたことが原因だった。

私の住居は繁華街に近い斜面に建った高層ビルの、そのまた頂辺に近い八階にあるので、窓からよく晴れた日など遠く富士が望まれたり、また夜ともなると、色とりどりのネオンが巷に輝いて、実に景色はよいのである。

しかし私は今の住居に移ったときは既に失明していたので、本当はその景色を一度も眺めたことはないのだが、不思議に夜ともなると巷にネオンの灯がともし、すがす

がしい晴天の朝など真白に雪をいただいた富士が遠望されるのである。

勿論、網膜に投影された天然色ではなくいつのまにか、はたの人々の何気ない会話などのうちにかたちづくられた独自の景色なのである。だがそれは実に微に入り細を穿っている。私の景色の中には富士だけがポツンとあるわけではなく、富士を中心にその前景も、足許によこたわる山々の姿までがちゃんと形をととのえている。

私は直接富士山を見てはいないが、そんな風に、私はやはり富士の姿を見ているのだ。

それにしても目の見えない筈の私が、何も窓外の景色を教えたりする必要はない、見えないなどと、いいながら実は、見えて

扉の御法語

宗祖上人の許に参じて、教えを頂いていると、同じお詞を一度ならず二度三度と承ることがあります。どこでどんな時というわけではなく、どのお弟子たちの耳にも温く懐しい上人のお詞が残っていました。こうしたお詞を集めたのが、勅修御伝第二十一の「上人つねに仰られける御詞」であります。

どのお詞を拝見しても、何れ全句であります。この御法語は厳しい中にも怪やかに仰られたという感じがします。

正月の餅で命を落したり、子供がゴム風船や飴玉をのどにつまらせたりします。食物を口に運ぶとき南無あみだ仏、のみ込むとき南無あみだ仏と唱えることは、痛烈ともいえるべきことであります。近頃は睡っている間にガス中毒で死んだり、薬さえシヨツク死があります。巡査派出所の前に掲げられている交通事故での死亡者数をみて、明日はわが身と思わぬ人はありますまい。

大きな駅にゆくと、自動販売機で売り出している傷害保険があります。機械が駅の片隅に置かれて目立たない為もあってか、余り利用されていませんが、そのくせ列車による傷害は皆無だと万人が絶対信用しているわけで

るんじゃないか、などという疑念を人に起こさせても、それはいたしかたのないことである。いまさらながら、私は自分のうかつなものいいがお可笑くなってしまう。

まだまだ、こんな失敗は数限りなくある。初めて私の家を訪ねて来た人など、私が失明の身なのできつと暗い表情でひっそりと居間にでも坐っているものと、思うらしい。ところがである、案に相違して私は勇しいズボンとセーターの仕事着の恰好のまま、勢いよくドアをあける、すると、きまって、

「森赫子さんはいらっしゃいますか？」などと、私を女中と間違えて聞くのである。

「はい おります」

「これこれののですがお会いしたいのです」

「どんな御用でしょう」

「あの 赫子さんは御在宅なのですね」
何というさしでがましい女中であろうといった口調でいう、

「ハア」

「恐れ入りますが、お取次ぎ願えません

でしょうか？」

「あの、私です」

などと、まことに珍妙な問答をかわすことも度々である。

こんなことを云ったからといって、別には盲人らしく見えない自分を得意がっているわけではない。むしろ心ならずも相手方の期待を裏切ったりすることに申訳けなさをさえ感じているのである。

しかし今の社会で身体障害はただちに経済的不安に脅やかされるといふ現実をのぞけば、目の見えないという、そのことだけで、決してむごたらしいみじめなことであるとはきめつけられないと思う。

むしろ私など失明という、どうしようもない現実の前に、まったく別種の新しい人生を一步からふみ出せたのだから、実に幸いなことだとさえ云えるのかも知れない。

だが、実のところ、失明して何が一番不自由といつて、やはり目の見えないことであらう、変な話だが、これで——つまり失明して——目さえ見えれば一段と素晴らしい生活であると私は思う。

もありません。とに角、生活が目まぐるしくなるにつれ、身の危険率も大きくなっているわけであります。また自分自身が危険にさらされているばかりでなく、他にも危険さを与えているわけであります。

この御法語が食事を例にとられているのは、申された上人よりは、お詞を受取ったお弟子たちの方が、三度の食事という最も身近かな適切な事だけに、強く感服させられたものでありましょう。毎日の食事に一口ごとにかなではお念仏、のみ込んではお念仏を申したならば、その他の一切の日常生活はいうまでもありません。

ただし、ここで注意すべきは、われわれが日常生命の危険にさらされているから、又は生命の危険を怖れるからお念仏を申すということではないということです。

別の御法語に「衣食住の三は、念仏の助業也。」とあります。日常の生活、その根本の衣食住等すべてのわれわれの動作は「念仏を申されん様にすぐべし」であります。念仏と生活というものの順序を間違えてはなりません。これは食事をとつて身体の壮健を保たせるのは正法を修するためであつて、単に食欲のための美食ではないのと同じでしょう。ただ問題は刻一刻流れてゆく生命を尊び、その一刻をお念仏で暮すことであります。



近代高僧伝

勤息義城伝

濃尾平野の一角、丹羽郡栄村に、鈴木武兵衛の二男として、義城が生をうけたのは弘化五年八月五日のことであつた。「一人出家すれば九族天にうまる」という仏法の地、信仰の厚い土地、出家者を出すことに喜びをわけあつた土地のならわし。鈴木家でも其の例にもれなかつた。義城も幼少にして一時、伊勢松坂の清光寺に入つて僧となつたが、幾ばくもなくして師僧の示寂にあい、続いて師僧なき後の頼みの綱であつた兄弟子も安養の浄土に帰られたので、悲嘆の涙にむせびながらも実家に帰えらざるを得なかつた。しかし其れも束の間、安政五年五月には再び仏縁にめぐ

まれ、飛騨高山の大雄寺に、義譽諦仁の弟子として貰われることになり、以来師のもとで厳格な修行をつみ、慶応二年許されて江戸に出て増上寺で宗戒両脈を相承した。思うに江戸時代の教学は、増上寺を中心として十八檀林で行われていたが、明治維新となり、秩序がみだれ教学は一時混乱状態におかれていたことがある。このような状態をとりもどすため、明治元年七月には増上寺に興学所がおかれ、同三年始めて知恩院に勸学所が設けられた。時に勸学所の講師として招かれたのが泉谷西寿寺の堪忍和上や雷雨律師であり、その許に待った学徒の中に義城があり、両師に深

く師事して宗乗及び天台学を修めた。

これより先き彼は、唯識因明の研究を志し明治元年三月居を江戸から京都に移し、智積院で弘現僧正から講義を受けることになった。弘現は当代に聞えた唯識の学匠である。移住当初暫くの間は寺町永養寺に居られたようであるが、後ち下鳥羽法伝寺の世話で伏見の西運寺に董住、以来何時も通学の折は、本を手放すことなく読書しながら歩行し、そのため牛に蹴散されたこともあつたという。

或時のこと、仏教専門学校では立派な金庫を注文し、教職員室の一隅に運ばれ置かれることになったが、偶々登校した義城師の目にとまった金庫、幹事に「立派な御仏檀が出来ましたね」と申されたという。徳の人、義城師にとって阿弥陀如来よりほか何ものもなく従つて金庫のあまりの立派さに御仏檀と見ちがえられたのであろう。又師は俱舎論をやつても、選択集を講義なされても、何時でも科段をきり、典拠となるべきページを一々指摘して、大論の何丁とか、安樂集の何丁とかと、親切に教示し、後日勉強のための資とされることが常であつた。所が日めぐつて学期

末テストを迎えた或る学生、答案をものし苦衷の策として、大論何丁・論註何丁とでたらの丁付けを記して提出した。学にあくまで忠実な師は、学生の丁付けがまさか出鱈目とはつゆ知らず、一々その典拠を原本について当って見たが見当らない。探がされてもない筈であった。休暇を終え新学期を迎え登校した時、例の学生に「アナタが答案にお書きになったあの大論というのは、どの大論ですか。一向ページがありませんが……」、これにはさすがの学生も面くらったとの話であるが、このエピソードは如何にも学者らしい師の一面を示めす逸話である。

師が宗学本校の教授に任ぜられたのは明治二十六年八月のこと、翌二十七年十月小石川伝通院六十九世の法燈をつぎ、三十一年には京都の浄土宗専門学院教授となった。京都では二条の大恩寺に住していたが、伝通院の方も依然として住職をつとめていた。偶々在洛中、明治も漸くおしつまる四十一年十二月伝通院は灰燼に帰し、原因は鼠がローソクをくわえて落したということであった。師は講義の前には必らず下見をされ、何等かの都合で

出来なかつた時には止むを得ず欠席され、下見をなされないで講義されるということは決してなされない。又書見中は、どのような人が訪問なされようと「唯今は書見中でありますから、又お出かけ下さい」と言い、遠慮なく面談を固辞し、そのような折には新聞とて目を通されなかつたのである。従つて伝通院炎上のことも知らず登校し、偶々来会させた大鹿愍成上人から其の趣きを聞かれたほどであった。

かくて学徳一世に高き師は、明治十二年十月二日内務省から大講義に列せられ、十七年八月には大政官から権少教正に補せられた。越えて二十九年四月正僧正勸学となり、終生教学の振興のため一身を捧げられたが、伝通院本堂が祝融の炎に見舞われたのを一転機とし仮堂の建立をまつて後住を野沢俊岡にゆだね、自からは大恩寺に隠棲し、寺務の悉くを弟子岡地義門にゆづり、寺内に閑静な一室をしつらえ、心にまかせて読書念仏し、実に平和な晩年を送られた。

師の嗜好されたのは般若湯と昆布湯であり又独立自尊の精神に富んでいた彼は、常にそ

の弟子たちに向つて「自分は生涯決して他人の厄介にはならない」と申されていたと言われ、命終の時など既に一カ月ほども前から、床の間に弥陀三尊の来迎仏をかけ、愈々命終という前日には頭を剃つて風呂に入り、翌日の午後三時頃、炬燵の中で念仏しながら、眼るが如く往生なされたという。時に大正十年十一月二十日、世寿七十四歳であった。歿後宗門は生前の功をねぎらい大僧正の位を追贈されたが、師は常に質素を旨とし、着るには多く綿服を用い、老境に入るまで桐下駄さえ召されず、粗衣粗食にあまんじて、信施の恐るべきことを繰りかえして申されたという。山下現有はその人となりについて「上人の行業清浄にして、学博く、徳高し、まことに蓮門の棟梁、教壇の巨匠」とたたえられております。

法名は

莊蓮社嚴譽上人功阿護法義城大和尚。

(大橋 俊雄)

悪魔の領土

岡 幸 一

「まことにこの世界は、一方から見れば悪魔の領土であり、欲の世界であり、血の戦いの場ではあるが、この世界において、仏の悟りを信ずるものは、この世を汚す血を乳となし、欲にかえるになさけ（慈）を以てし、この世を悪魔の手から奪い取って、仏の国となさんとする。」

一つの杓を取って、大海の水を汲みつくそうとすることは、容易ではない。しかし生れかわり死にかわり、必ずこの仕事を成しとげようとするのが、仏を信ずるものの心の願いである。」

外はさんと太陽がかがやいていた。本から目を離して、窓の外を眺めると、狭いわが家の庭にも陽が射して、そこだけは雪がと

けているけれど、かげの所ははっきり一線をひいて雪のまま凍っていた。

このまちは、最近までビルと名のつく建物一つなしの小都市であり、東京に近いだけに逆って取残されたような古い城下町である。大宅氏がこのまちを評して、小用の便をはたすためにだけにあるといった。その通りで東京から来る客たちは、駅を出るとすぐバスに乗って温泉地に向ってしまふ。また箱根の上からバスで帰ってきた客は、バスから降りると駅の便所にかけてこんで、それから急いで帰路につく。

こんな忘れられたようなまちにも、昨年五月に四階建の西武デパートができた。駅前なさやかながら営業していた喫茶店、写真

屋、それにまんじゅう屋等の四、五軒を買収し、猫の額のような小さな所で、しかもほそ長い二等辺三角形の、よくこんなところにビルが建ったと驚かされる位のものであった。それでも子供たちは初めてエレベーターに乗ったといつて大喜びであつたし、女房たちは階段をあがって売場にゆくという近代感かくにただ嬉しうであつた。また若い人たちは四階の楼上で味う生ビールに気焔をあげていた。しかしいかにも小さな所に建てられた三角のデパートである。看板こそ大きく掲げられたが、この開店によって近所の小売店が影響を受けるほどではなかったのも当然のことであつた。

ところが今度は西武デパートに道路一つ隔てた反対側に箱根登山デパートが建てられた。路面電車が廃止されてから、駅前の電車発着所が空地であつたところに工事を始め、それも大急ぎの工事をやって西武デパートより遅れること僅か五カ月の昨年十月に開店することができた。このデパートは駅の正面であり、七階建で、巾も広く実に堂々たるものにみえるが、残念ながら奥行きが全くない。

信 仰 実 話

入口から数歩進むと、もうそこは反対側の出口になっている。機をみるに早い商人がその出口の所に土産物屋を開いた。うっかりするとデパートの玄関はこの土産物屋のためのものかと勘違いする位であった。

それでもエレベーターのあることはもちろんで、今度はエスカレーターもある、子供ばかりでなく、男も女も老人もエスカレーターに乗るのは初めてで買物をする目的もないままに、上に上にとあがってゆく。すると最後は天国ならぬ食堂に到着する仕組になっている。食堂の外に見るものもない七階まであがって、一寸テレた顔をしながら階段を下りてゆく。

今まで一番大きな建物は、郵便局に警察、映画館位であったものが、一度に二軒もデパートが建った。まちの美観という上からみても、エレベーター、エスカレーターを設備した点からいっても、たしかに土地に異彩を放ってくれた。しかし一度にどうして、二軒ものデパートをして同じ所に無理をしてまで建てられねばな

らなかつたか、まちの人々は又しても嫌な感じにさせられた。

元来この箱根一帯は古くから交通機関に、土地に、旅館にと西武、箱根登山の両財閥が深刻に争ってきたところである。競争相手のあることは、発展も早いし、サービスもよくなって利益になる点が多い筈であるが、この両財閥の場合は全く事情が違う。巨万の資力もすべての施設も、他方の財閥を倒すためにだけ動いているからである。財力に驕り、傍若無人に振舞うこの争いは、底のない泥沼に落ちて、陰惨な地獄図そのままの姿でしかない。

一日の静養を求めて来る人たちにとって、露骨な醜い両者の争いを見せつけられることは、やりきれない気持を強いられるのである。そればかりでなく、永年のこの対立が、土地の人たちに対しても暗い嫌な影響を与えている。

×

「悪魔の領土は欲であり、闇であり、争いである。そねみ、ねたみ、にくみ、あざむき、へつらい、おもねり、かくし、そしることで

ある。

いまそこに、智慧が輝き、慈悲が潤い、信仰の根が張り、歓喜の花が開く。悪魔の領土は、一瞬にして仏の国となり、微風そぞろに吹きわたる和楽の春となる」

外を吹きすさぶ寒風にあたるのも嫌だし、雪どけの悪路を歩く気にならぬものも事実であったが、ほんとは外出して街の人と顔を合せるのが億劫だったからである。私の勤める学校の職員が電蓄を持ち出して売払ってしまった。その職員は急に金が入用になって、一時学校の電蓄を売り、俸給を手にした時に買戻すつもりであった。しかし警察の通知でその事実を知った私は、何んといっても物品保管の責任をおわなくてはならない。早速教育長の手許まで進退伺いを出したが、教育長はその必要はないと慰留してくれた。教育長は更に私の進退伺いを受理すると、当の職員を処罰しなければならなくともいった。だが私は私なりで自宅で謹慎していたわけであった。

私は自分の非をかばうために、他人の非行をいうわけでないが、ここ数年間に私たち同

信 仰 実 話

僚に事件が多かった。事件内容が明白になって転動となった職員については別としても、大きな事件がいくつもあった。

私より三年先輩の校長の如きは、いよいよ辞める時、いや辞めさせられる時には、退職金百数十万円を注ぎ込んでも、まだ足らぬ大穴をあけていた。彼は古参校長であつたし、一通りの

役職を歴任したが、中でも組合長の時代は、彼の能弁を遺憾なく發揮して県下にその名をうたわれたものであつた。U校のワンマン校長という名前も彼がやり手であるからといわれ、不信を抱く者となつたが、PTA、学級等の会費を商人には払わず、殆んど横領していたということを誰も知らなかつたのは不思議であつた。私などは彼が辞めるのは、土地の教育長になるためとか、議員に出馬するとか噂を本気にしていた程であつた。

また後輩のK校長の如きは、穩健であり教育熱心で信望を集めていた。しかし彼の事務職員が免職になつたとき、彼は平気でそのま

ま校長職にいたのも不思議であつた。この事務職員は市から給与を受けて給食係をしていたが、永年に亘つて給食物資を横領していた。それが市議会で問題となり、当人はすぐ職を免ぜられたが、市の職員の非行だからといって彼は辞めようともせず、そのまま現に校長である。教育熱心という言葉がこうした感覚の上になり立っているとしたら、私どもは社会のあり方をもう一度考え直さなくてはならぬのであるまいか。

またある時、T学校で半月分の俸給が一瞬の間に紛失したことがある。T校は畑の中にポツンと建てられた学校である。教頭のHが地方事務所から俸給を一括受取つてきて、俸給の入った鞆を事務室の机におき、一たん部屋の外に出て、約三分位して帰つてみると鞆とも紛失していた。この事件の善後策を講ずるために招集された校長会において、「不可抗力による紛失事件」という結論をだしたが、何が不可抗力であつたのか、T校の校長が「何んとも不可抗力でありました」との説明を重んじたためであつたろうが、その席に列していながら私にはどうも判らなかつた。やがて教職員一同には俸給が渡されたが、犯

人はもちろんのこと、失せた金が出なかつたことはいうまでもない。

学校の責任者、幹部でさえこの通りであつた。私の所の職員が電蓄を盗むつもりは決してなかつたといひ張り、現に平常通り勤めている神経を不思議がるのは私だけなのであるうか。

私は部屋で本を読みながら、現代が余りにも仏の国から遠すぎると思った。誰でも落度はあるし、心のゆるみもあるが、内に省みることの全くなかつた世相を、私は悪魔の領土だと思ふのである。

嘘かほんとか、給与のよい会社ほど争議が深刻だという。権力で争い、全力で相手を倒すことは偉いもののようにいわれる。私は悪魔の領土に、中心になる一本の柱がないように思われる。この一本の柱は何か、とても私如き微力な者に判らないし、これだという勇氣はない。しかし、ただ自分だけは仏の力にすがつてお念仏を申したいと念ずる。

×

×

×

×

×

×

心のおい



秋 松 子

年とつた婦人たちが数人よりあい、よもやま話がおもしろくはずんでいた。

「いまどきの若い者は仏教に関心がなくてまったく困つたものよ。私が死んだら、お仏壇には、蜘蛛の巣が張るんじゃないかとおもうのよ……」

「心配御無用よ、老人死んで村絶えずというじゃないの。心配しなくても、あなたが生きているうちに、せつせと仏教徒らしく行つていったら、嫁さんもお孫さんもちやんと見ていて、あなたのなさつた通りまねするから大丈夫よ」

「そうかしらね……」

「本当よ、子供というものは親のいうことは一向に聞かぬものだけど、知らぬ間にちゃん

と真似しているものよ。この間もこうなの。

孫の女の児がままごと遊びをしているのを見ていて、驚いてあいた口がふさがらなかつたわ。」

と笑いだした。

その老婦人は、大変そそつかしく、外出するときに玄関を出てから、かならず忘れものをし、戻つてきては、

「ちよつとちよつと手ぶくろちよだい」

などと大声で呼び、家人をあわてさせるらしい。ある日、入れ歯をはずして置いたまま忘れて出かけ、例のように玄関でさわいだことがある。ところが、ままごとあそびをしている子供たちを見ていたら、奥さまになつていらしい孫が、ふろしき包みを手にして、

「では行ってまいります」

とすまして出てゆくふりをしていたかと思うと、あわてて戻ってきて、

「大変大変、わたしの入歯を出して！」

といった。すると、お留守番役の子が、

「あら、ありませんわ。どうしましうどうしましう」

と、そこらを引っくりかえしてキヤツキヤツとさわいでいる。その様子があまりおかしいので、

「ちいちゃん何にしてるの？」

と聞くと、

「いまね、おままごとしてんの。これおばあちやまの真似なのよ。」

と答えたという。

これには、まったく参つてしまったと、その老婦人は告白し、そこで、一同大わらいとなった。

幼い子供たちが、生後三カ年ほどにおぼえることが実に多く、まったく大切な時期であるということである。

信仰相談

解答者 竹 中 信 常

生活の中に信仰を織り込んで行く事です

親と子の信仰のズレ

をどうしたらよいか

—お た ず ね—

私の家は夫婦と子供三人。中級のサラリーマンです。子供達は高校二年の男、中三の女、中一の女です。家中、平常は至極平和で和気あいあいとしておりますが、信仰のことになると、子供達は、がぜん、強い意見を主張します。

私の家は、代々、浄土宗なので、彼岸やお盆には墓詣りをし、せがきやお十夜には、家内が参詣しております。彼岸などに、お寺へ行ってみますと、よその人は、子供づれで賑かにお参りしているのですが、私の家の子供達は、どうしてか、一緒に行こうとしない。無理に連れて行こうと

すると、長男などは、「西方極楽など、ありもしないものを信じて、念仏を唱えるなんて、バカ気ている。」とか、「寺なんぞは、年寄りが、ほかに行くところがないので、行くんだ」とかといって、さからって仕様がありません。家内なども、寺の法要から帰って来ても、「みんな、大勢で来ているのに、私一人だけなので、淋しくて、気が引ける」などと、愚痴をいいます。

私自身、子供の頃、両親に連れられて、お寺参りをした思い出もありますので、何とかして、子供達にお寺まいりさせようと思うのですが、どおしたらよいでしょうか。こんな調子では、私達がいなくなったら、誰もお参りして下れなくなるのではないかと思うと、心細くなって参ります。

(東京・荒川区・会社員・四十九才)

—お 答 え—

御質問の大体の趣旨は、現代の日本の社会で、全体的に心配されている問題のようです。それは、信仰にかぎらず、道德、思想、しつけなどの面でも、次の時代をなう青少年達と、現在の大人達との間のズレが大きく目立っているようです。

ここでは、もちろん、御質問のように、「信仰」の問題を中心にするつもりですが、しかし、これは、「信仰」だけを切りはなして、その解決をはかろうとしても、それは無理なようです。

と、申しますのは、「信仰」というものは、私共の生活の全体に深く、そして複雑に、組み込まれて、私共の、それと気のつかないような、ものの考え方、感じ方、生活の仕方となってあらわれて来るものなのであります。それですから、信仰とか、宗

教とかという何か特定のものがあって、特定の時に、特定の働きをする、などと考えるではありません。もつと、生活と一つになった、私共の血や肉に成り切っているものだと思して下さい。

○

そこで、御手紙をもう一度、読みかえしてみますと、すぐに、気のいくことがあります。「子供づれで、お寺まいりに行こうとするが、子供達は行きたがらない」と書かれています。お寺まいりをするとは、成るほど、信仰的な行為かも知れません。しかし、そのすべてではありません。逆にお寺まいりをしなくとも、必らずしも、不信仰だとはいえません。

あなたは、信仰すなわちお寺まいり。だから寺まいりをしないことは無信心、というふうにお考えのようですが、これは少し速断すぎるように思えます。

信仰というものは、その本質は少しも変わりませんが、それにつきまとう表現とか形態とかは、時代によって、また社会・環境

によって、いろいろに変わるものです。仏教でも、インド、シナ、日本と伝わって来るに従って、随分変わって来ました。また、東洋社会には、静主義の仏教が盛んですが、西洋社会では活動的なキリスト教が信じられております。同じ日本人でも、仏教徒のほかには、神道を信ずるもの、キリスト教に傾くものなども、少くありません。これ等のことは、みんな、その信仰の表現・形態のことなりに応じてみられること柄なのです。

一軒の家の中でも、この頃では、親の職業を嫌う風潮が出て来ました。大工の子は大工にというのは、封建的だといって排斥されるようになりました。それと同じで、信仰も、必らずしも、親の抱いている信仰を、そのまま子がうけつがなければならぬということ、余り重要に考えられなくなって来たのです。

○

こうした風潮を、いち早く感じとっているのが、現在の若い世代の人々です。親の

することは何でも古い時代のことである。信仰なんというものは合理的でない。迷信である。といわれると、心の中ではそれ程でなくとも、つい反抗してしまふ。こういった心情に、今の若い人々はい入るのです。

そこで、もう一度、ふりかえって、よく考えてみて下さい。第一には時代が変わっているということ。しかし、これは世代が経って、子供もやがて大人の世代に入るので、余り気にすることは無いと思います。第二に、もつと大切なことは、信仰というものを、特別なものとして、切りはなして考えず、生活の中に織り込んで行くことです。お寺まいりだけを要求するのではなしに、朝に、晩に、あなた自身、御先祖のお位牌にお線香を上げ、折りにふれて、仏教の話をしたり、信仰の話をして、あなたがたが先になって、生活と信仰とをよく調和させて行くことです。有名な言葉を引用して、この回解の結尾と致しましょう。「エミールの母は神という言葉を用いて、この回解の結尾と致しました」

信仰相談

解答者 竹 中 信 常

生活の中に信仰を織り込んで行く事です

親と子の信仰のズレ

をどうしたらよいか

—お た ず ね—

私の家は夫婦と子供三人。中級のサラリーマンです。子供達は高校二年の男、中三の女、中一の女です。家中、平常は至極平和で和気あいあいとしておりますが、信仰のことになると、子供達は、がぜん、強い意見を主張します。

私の家は、代々、浄土宗なので、彼岸やお盆には墓詣りをし、せがきやお十夜には、家内が参詣しております。彼岸などに、お寺へ行ってみますと、よその人は、子供づれで賑かにお参りしているのです。が、私の家の子供達は、どうしてか、一緒に行こうとしない。無理に連れて行こうと

すると、長男などは、「西方極楽など、ありもしないものを信じて、念仏を唱えるなんて、バカ気ている。」とか、「寺なんぞは、年寄りが、ほかに行くところがないので、行くんだ」とかといって、さからって仕様がありません。家内なども、寺の法要から帰って来ても、「みんな、大勢で来ているのに、私一人だけなので、淋しくて、気が引ける」などと、愚痴をいいます。

私自身、子供の頃、両親に連れられて、お寺参りをした思い出もありますので、何とかして、子供達にお寺まいりさせようと思うのですが、どおしたらよいでしょうか。こんな調子では、私達がいなくなったら、誰もお参りして下れなくなるのではないかと思うと、心細くなって参ります。

(東京・荒川区・会社員・四十九才)

—お 答 え—

御質問の大体の趣旨は、現代の日本の社会で、全体的に心配されている問題のようです。それは、信仰にかぎらず、道徳、思想、しつけなどの面でも、次の時代をになう青少年達と、現在の大人達との間のズレが大きく目立っているようです。

ここでは、もちろん、御質問のように、「信仰」の問題を中心にするつもりですが、しかし、これは、「信仰」だけを切りはなして、その解決をはかろうとしても、それは無理なようです。

と、申しますのは、「信仰」というものは、私共の生活の全体に深く、そして複雑に、組み込まれて、私共の、それと気のつかないような、ものの考え方、感じ方、生活の仕方となってあらわれて来るものなのであります。それですから、信仰とか、宗

教とかという何か特定のものがあって、特定の時に、特定の働きをする、などと考えるではありません。もつと、生活と一つになった、私共の血や肉に成り切っているものだと思して下さい。

○

そこで、御手紙をもう一度、読みかえしてみますと、すぐに、気のいくことがあります。「子供づれで、お寺まいりに行こうとするが、子供達は行きたがらない」と書かれています。お寺まいりをするとは、成るほど、信仰的な行為かも知れません。しかし、そのすべてではありません。逆にお寺まいりをしなくとも、必らずしも、不信仰だとはいえません。

あなたは、信仰すなわちお寺まいり。だから寺まいりをしないことは無信心、というふうにお考えのようですが、これは少し速断すぎるように思えます。

信仰というものは、その本質は少しも変わりませんが、それにつきまとう表現とか形態とかは、時代によって、また社会・環境

によって、いろいろに変わるものです。仏教でも、インド、シナ、日本と伝わって来るに従って、随分変わって来ました。また、東洋社会には、静主義の仏教が盛んですが、西洋社会では活動的なキリスト教が信じられております。同じ日本人でも、仏教徒のほかには、神道を信ずるもの、キリスト教に傾くものなども、少くありません。これ等のことは、みんな、その信仰の表現・形態のことなりに応じてみられること柄なのです。

一軒の家の中でも、この頃では、親の職業を嫌う風潮が出て来ました。大工の子は大工にというのは、封建的だといって排斥されるようになりました。それと同じで、信仰も、必らずしも、親の抱いている信仰を、そのまま子が受けつがなければならぬということ、余り重要に考えられなくなって来たのです。

○

こうした風潮を、いち早く感じとっているのが、現在の若い世代の人々です。親の

することは何でも古い時代のことである。信仰なんというものは合理的でない。迷信である。といわれると、心の中ではそれ程でなくとも、つい反抗してしまふ。こういった心情に、今の若い人々はい入るのです。

そこで、もう一度、ふりかえって、よく考えてみて下さい。第一には時代が変わっているということ。しかし、これは世代が経って、子供もやがて大人の世代に入るので、余り気にすることは無いと思います。第二に、もつと大切なことは、信仰というものを、特別なものとして、切りはなして考えず、生活の中に織り込んで行くことです。お寺まいりだけを要求するのではなく、朝に、晩に、あなた自身、御先祖のお位牌にお線香を上げ、折りにふれて、仏教の話をしたり、信仰の話をして、あなたがたが先になって、生活と信仰とをよく調和させて行くことです。有名な言葉を引用して、この回解の結尾と致しましょう。「エミールの母は神という言葉を用いて、この回解の結尾と致しました」

木 啄 川 石 ①

——道 へ 還 る 然 法——



仙 隆 藤 須

は じ め に

啄木といえば、禅宗のお寺に生れていながら、宗教とは関係無し、むしろ反宗教的、宗教否定者のように取扱われてきている。歌人としての彼の地位は、今日、日本国中はおろか、ソ連あたりの海外にまで紹介されている（ような現状である）が、“寺育ち”という彼の見逃してはならない生いたちと、それに起因する彼の宗教に関する思想とについては余り考えられておらないようである。

そこで私は、私のこれまでの乏しい研究から、そのようなことにふれ、果ては私なりに見出した彼の宗教観について述べ、しかもそれが実は、法然上人へとつらなる浄土念仏の道である、ということについて考えてみたいと思うのである。

もとより専門的な啄木の研究家でもなければ、また詩や歌の文芸の世界に知識をもつものでもない、極めて幼稚な記述ではあるが、これを以って幾分なりとも、念仏ということの偉大さが、認識され、現代に生きる念仏の血の流れが信解されれば、これに過ぐ

る喜びはないのである。

（文中引用の啄木日記は岩波発行の啄木全集によるものであり、その他の引用書は、その都度記入しておく。）

啄木は明治の人であるから、文中の年数はすべて明治年数である。）

一、啄木と宗教

啄木はあらゆる角度から研究されて来ている。しかし私は寡聞にして、未だ彼をめぐる宗教の問題について、深い研鑽をしたものを見ない。大抵の場合、彼の伝記だとか、思想だとか、またはその作品の芸術的価値だとかのみを、極めて限られた角度から眺めたものが多く、たまたま彼の人間性を赤裸々に発表したものがあったとしても、仏僧の子として生れ、死ぬまでの約半分を寺院生活に送った“彼と宗教との問題”、“宗教と啄木”という見逃してはならない問題を深く追究したものはない。たまたま啄木は単に晩年の「無神論」の告白から、無宗教主義者、または反宗教主義者の如くに扱われている場合が多いようである。

彼の義弟（啄木夫人の妹の夫）宮崎郁雨氏

なども「彼は無神論者であつた」(石川啄木読本『函館落ちした啄木』)といい、しかも「次々と借金を重ねて行つた彼の無反省的行動の裏には……寺育ちといふ特殊な生態の生んだ自助心の稀薄とが、大きく影響していたのではあるまいか」とか「坊主に金貸せあ家

鴨に卵かへす心はさらに無い、といふ俗語を今も覚えてゐる。これはその時代の寺門の人達の貸借観念の超越ぶりを諷刺したものであつたらうが、啄木の生活観念の何処かにそれと一脈相通のものがある様に私は観察してゐた……彼のお寺といふ環境によつて育成され

た(と考えられる)根強い特殊の性格に対しても惜しみなく驚嘆する」(海峽『啄木の歌から拾ふ』)などといつて、「宗教と啄木」との問題については極めて低俗な発言よりしてゐないのである。

僅かにドナルド・キーン氏が「啄木の日記と芸術」(読本)の中で、彼と宗教の問題を論じ、「或る評論によると啄木が生涯を通じて宗教を拒否しつづけた、といふが私は賛成ができない。寺や教会が嫌いであつたことは確かであるが、無教会主義の基督教に相当影響を受けたやうであ

る」という、『枕につきて後、涙流れてとどまらず。嬉しさ、有難さ、思うほどに思うほどに胸にあまりて、法恵の雨、今しとどにわが魂を洗ふかとぞ覚えし。ああ、神は人々の心に宿れり。かくしてもこの世にいと大なる力なしといふをうべきや、黙禱多時にして漸く眠りに入るをえたり』という明治四十年一月六日の彼の日記を引き、「啄木は段々、不幸の集中するに従つて、この信念を失つたが、宗教を拒否したのではなかった。むしろ信念のある人が羨しかった」と論じてゐるが、これだけでは少くとも仏寺に育つた彼を見るのに充分ではないようである。

それで私は「啄木と宗教」を考えてゆく手始めとして、先づ彼の仏寺での生いたち、及びお寺や仏教、又は宗教に対する彼の思想の変遷といったようなものについて述べていきたいと思うのである。

啄木とお寺

啄木が岩手の禪寺の息子であることは周知の通りである。啄木の女婿石川正雄氏や、啄木研究家岩城之徳氏等の話によると、啄木は



明治十九年二月二十日岩手県日方村の曹洞宗常光寺で生れた。

ここで啄木の家系を述べてみたいが、それには母方のほうから説明したほうが解り易い。しかもそれはかの法然上人の弟子となつて名を残した蓮生坊こと熊谷次郎直実から始まるのであるから、実に興味深い。

熊谷直実の子に熊谷小次郎直家なるものがあったという。その二十二代目の裔熊谷六郎直常は出家して超榮徳円といい、奥州南部土沢の常照寺の開基となった。その徳円より十一代目の末孫に熊谷条作常房なる者が存する。この常房に九名の子供あり、その末娘カツが啄木の母である。長兄が工藤という家に養子にゆきカツは工藤の籍にあって工藤カツとなつてゐる。実は熊谷カツで、直実の系統を引くわけである。

少し煩雑となるが、カツの次兄直季が熊谷家を継ぎ、この直季は後故あって出家し、葛原対月と名乗るのである。この対月の弟子で石川一禎が啄木の父である。つまりカツは兄の弟子と結婚したわけである。

それで今度は父の方であるが、一禎は義経

四天王で有名な亀井の裔といわれる亀井峰淳という田舎では珍しい漢学者の子だったそうであるが、母（啄木の祖母）は一禎を懷妊中亀井と離婚、実家で一禎を生み、のち石川与左衛門なる者の後妻となり、ために一禎は与左衛門の五男として入籍したという。十五、六歳の時出家、前記対月の弟子となり、始めは対月が平館の大泉院に住していたため同院で修業していたが、対月は後、盛岡の竜谷寺に移つたので一禎もそこに移り、数年後対月のもとに手伝いに来ていた対月の妹カツと結ばれたわけである。

対月は仲々学識のある禅僧だったそうで、歌道もよくし、柴庵なる号を有する程だったらしいが、弟子一禎もその影響で歌をよくしたといわれる。

ここで考えられることは、啄木の家系はかように、仏門と深い関係にあり、しかも学者、歌人、等の血を両親から引いている、という興味ある事実である。非凡なる彼の才能を思うとき、それもあながち偶然だったとは思われないような気がするのである。

人物叢書「法然」を読む

伝記というものは誤りが多いものである。自叙伝ですら誤りがあるのであるから、先生を追慕する弟子達によって書かれた伝記などに誤りが多いのは当然である。成程この場合は先生の良い面は出る。むしろ良い面は誇張されるのが常であるが、道徳的な徳目ばかりが並べてあって、ちっとも面白くない。いわゆる先生を神聖視してしまい、人間としての先生を忘れてゐる場合がほとんどである。伝記というのはこういうものであるという考え方が世間一般のものであるらしい。

法然上人の伝記は「源空聖人私日記」をはじめとして沢山ある。しかしながらどれをみても一定の型にはまっております、段々と部分的に言葉を加えられていったように思われる。「四十八巻伝」などは実にみごとな絵巻である。そしてこれらの伝記は布教伝道の材料として使用し、尊ばれたものである。しかしながらこゝに書かれている

啄木の家系

熊谷直実

二十二代目

熊谷直家

直常 (出家して超栄徳円)

(母方)

直常より十一代目

熊谷常房

次兄直季 (出家して葛原対月)

長兄 (工藤の養子となりカツはこの籍に入れられ工藤カ)
(ツといった。)

九番目末女カツ (啄木の母)

(父方)

義経四天王の
亀井の裔

亀井峰淳

妻

(後、石川
家に後妻)

一禎

啄木の父。

石川の籍に入れ
られる。

一 (啄木)

(一禎、対月の弟子となる)

啄木は長男だったので一と名付けられた。

いたため、啄木は私生子工藤一となっていた

当時のこととて曹洞宗の僧籍にあった一禎

らしく、明治二十五年九月三日啄木尋常二年

はカツを入籍させず、内妻工藤カツとなって

の頃ようやく石川に入籍となったのである。

法然上人も弟子達の追慕によって書かれたものであり、人間としての法然上人ではなく、神聖視されたものであって、現代人にはピンとこないものがある。しかしながら法然上人の七百五十回忌を迎える現在、正確な史料をふまえて事実を究明することは困難この上もない。だからといって昔のままの伝記でよいということは決してない。日蓮・親鸞・道元など、鎌倉仏教の研究が進んでいる今日、法然上人の伝記の上にも内外の学者によってメスが入られることは当然である。

今回日本歴史学会編集「人物叢書」の一巻として、田村円澄氏によって書かれた「法然」は、新研究を取り入れ、ベールをぬいた人間としての法然上人をえがいたところに特色があり、待望の伝記の出版を喜ぶものである。

(新書版、二七〇頁・定価二〇〇円、

吉川弘文館発行)

(鈴木成元記)

二、寺を愛した啄木

さて日戸の常光寺で生れた啄木は、翌二十年春、父一禎が隣村^{しよな}洪民の宝徳寺に転住したため、彼も勿論ここに移された。

この宝徳寺こそ彼が十数年暮した寺でありし、「かにかくに洪民村は恋しかり」と終生懐しんだ故郷も、この洪民である。

ところが、この宝徳寺こそ、実は彼の生涯に波瀾万丈を呼ぶ存在となったのである。彼の一生はこの宝徳寺によって左右された、といつても過言ではないのであり、歌人として今日の名声を高めることができたのも、実はこの宝徳寺によって決せられた、といつても差支えないようである。

というのは、常光寺よりは経済的にもいくらか楽で、まあまあ安泰という宝徳寺の地位から、父一禎が退かなければならない、という悲劇が起つたからである。

それは啄木二十歳を数える頃のことであるが、次のような事件だったのである。

彼はその頃東京にいたのであるが、父一禎が曹洞宗宗務院へ払う宗費百十三円余を怠納

したというので、宗務院から三十七年十二月二十六日付で一禎の住職を罷免する、という

発令がなされたのである。そして一禎夫妻は寺を追出されたのである。当時百十三円といえは相当な額であるが、一体どうしてこんなに宗費が滞つたのであるか。またそんなに尨大な宗費だったのか。私にはわからないが、これには多分に裏面に檀家との感情問題が介入していたようである。石川正雄氏はこれについて「一禎の田舎にまれな学問好きと、その自信からくる一際見識高い態度が、素朴で因循姑息な庶民農家の人々に高慢な感じを与へ、親しみをもたせなかった」という「一禎の来任で寺を出ねばならなくなった前住職遺族への同情と相まって見識高い一禎を一層こころよく思はなかった。これが後年一家が寺を追われねばならなかった原因の一つとなつた」といつているのである。（啄木の生涯）

事実その後宗務院では宗令第二号をもって

一禎の住職罷免を取消しているのであるが、檀家村民は啄木一家の復帰を妨害したばかりか、村から追出す運動まで起したのである。そしてその後啄木父子は懸命に宝徳寺再任に

努力したが遂に結実せず、啄木に寺院での生活は再び訪れなかったのである。

一禎は二十八年宝徳寺を出て以来盛岡に借家し、売食いの哀れな生活であつたが、文学に志して上京していた啄木は、この哀れな父そして母のために涙をのんで盛岡に降つたのである。当時丁度二十歳、彼は帰ってから愛人堀合節子と結婚し、いよいよ一家扶養の責任を担う羽目となつたのである。

十七歳上京、病気で一時帰つたが、十九歳再び上京、多くの雑誌に詩作を発表、特に詩集『あこがれ』を上梓、天才浪漫詩人の名声を高めたのであるが、宝徳寺事件はこの彼に悲しい都落ちをさせてしまったのである。

かように宝徳寺は彼にとって、あらゆる意味で忘れることのできない寺であつたらうし彼はまた宝徳寺での生活を懐しんで次の如き歌をのこしているのである。

○ふるさとの寺の御廊に、踏みにける

小櫛^{せき}の蝶を夢にみしかな

○ふるさとの寺の畔^{ほとり}の、ひばの木の

いただきに来て啼きし閑古鳥！

前者は「一握の砂」、後者は「悲しき玩具」

に収められているものであるから、少くとも彼二十三歳以後の所謂晩年に属する歌であるが、その頃でも幼少での寺の生活を忘れることができなかったのである。

四十年一月六日（二十二歳）の日記には「予は思ひ出でぬ、ここの宝徳寺裡の静けき一室、詩作にふけし春の夜の雨の音を」と記している。

前述の如く宝徳寺は啄木が生れた翌年から十数年暮した寺である。であるからその愛着も易々とは消えなかったであろう。彼の「林中日記」中には次の如くも記している。「三月八日、今日少年等と共に寺の小僧なる奴が来た。無論他郷者。予は今迄これ程卑俗な厭な人相を見た事がない。その又音声の厭な事年令は十八だとか。（中略）此村の寺といへば、自分が十幾年の間育った処ではないか。その寺が今這磨奴の蹂躪に委せられてあるのかと思ふと、実に何とも云へぬ厭な気持ちになった。」これは三十九年二十一才の時のものであるが、この前年、父が寺を追われているのであるから、後に入寺した人々への激しい憎

(童)(心)(仏)(心)

音の無い国

目がさめると、すぐにラジオが鳴り出し、眠りにはいるまで、音、音、音の連続です。

「家の子は、どうもそわそわして、少しも落着きが無くて困ります。」

おとなのペースに巻きこまれた道雄君の頭の中は、いつもワツシヨイ、ワツシヨイト、いらだちがちです。

道雄君のおとうさんは、このままでは駄

悪の心があつたのであろう。それにしても寺に対する愛着がよく現れている。

また四十一年（二十三才）、釧路新聞時代も釧路の書店から石原即聞の『仏教哲学汎論』を買っていることが二月六日の日記に見えるから仏教そのものとも全く絶縁したわけではなかったのである。

更に同年十月二十八日の日記には浪民の寺

目だと痛感して、家族全員を「音の無い国へ十分間散歩」という強行策を立てて、すぐに実行しました。

それは、毎夜、家族全員が揃った時間に皆を仏間に正座させ、ラジオもテレビも、すべての音響を絶ち、今日一日の感謝と明日への希望を祈つて瞑目合掌。およそ十分間程の日課を設けたのです。この効果は靦面。道雄君をはじめ、おとな達までが、心にゆとりを持つ事ができたといえます。

「音の無い国へ十分間散歩」。どこの御家座にもできる日課ですが、親が率先する事が必要です。

(淵)

のリンゴのこと、その他二時間も枕の上で寺のことなど考えて、十一時近くに起きた。と記されている。この時は東京本郷森川町の蓋平館にいたらしく、後年の東京の生活の中でも寺のことを思いつづけていたのである。

(つづく)

× × ×

会員だより

「光」今春の秘題であるこの文字からは、
誰しも輝かしく明朗なものを感じます。

が、「寺」「仏」という字からは意外
「葬式」くらいしか聯想しない向きもある
現状です。実に残念。今後の宗教はもつと
明朗積極的であって欲しく存じます。

私の家では、お正月元旦にお寺様をお招
きして、お経をあげていただいております。
す。

元朝や 読経ながれてわが宿は
初日の光 かがやきにけり

金色の仏壇に薫香かざり、座敷の奥深く
まで旭光さし込み、まことにすがすがしい
新年の気分を味わうことが出来ます。

合 田 徹 雪

新規会員

東京	渡辺祐学様
"	山川トヨ
"	不破勇
"	谷 淑子
"	鶴殿志津子
福岡	久志本鉄之祐
北海道	種市礼子
佐賀	森田雄弘
和歌山	村上康雄
"	須田隆学
兵庫	田原昭和
青森	福土平次
千葉	橋本貞雄
"	関 弘
神奈川	大島太三郎
"	宮田稚光

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円 (送料 四円)
会費一力年 金六〇〇円 (送料不要)

浄 土 二月号

昭和十年五月廿日
第三種郵便物認可
昭和三十五年一月廿五日 印刷
昭和三十五年二月一日 発行

定価 五十円

編集人	村 瀬 秀 雄
発行人	佐 藤 密 雄
印刷人	神 谷 秀 雄
印刷所	神谷印刷株式会社
発行所	法然上人顕仰会

東京都品川区上大崎一ノ七八二

振替東京八二一八七番

The testimonial
from the governor of
Kyoto
awarded to
U. NAKAMURA,
the director



The letter of
gratitude from
the Mayor of
kyoto sent to
NAKAMURA FUNGUS
CHEM. LAB.

中村医学

中村医学必携
実験写真入ア
ト縮本贈呈
御申込下さい！

医学ニュース
中村医学の学理を
世界に発表さる
大阪医大の名誉
教授谷村博士は
兼て中村菌液の
実験を実施され
その卓効力を刷
新論文に英訳さ
れて全世界の医
学界に報告の光
榮に浴しました

全治に実力作用する特
許フザリユームの解毒
から病原の淘汰作用！
発生シワルツマン因子
の滲透から再生作用！

中村医学にて難病の治る真理

中村医学の基礎



恐るべき耐性菌を崩壊淘汰する



滲透するバクテリア層を完全淘汰する



例 告 報 話 実 験 実

- (一) 高血圧で脳溢血の危険状態を好転恢復されている報告。
- (二) 心臓病特に危険な狭心症の危篤を好転恢復している報告。
- (三) 癌腫の進行を阻止し癌細胞を溶解淘汰して食道癌、胃癌、舌癌を恢復している報告。
- (四) 肺結核の治療中に耐性悪化した薬毒の副作用を好転して恢復されている報告。
- (五) 肝臓を腫らし胆嚢を痛めた危篤の入院患者が好転恢復した報告
- (六) 胃潰瘍で食事も出来ず手術を要する危篤患者が好転恢復した報告。
- (七) 腎臓、糖尿病で入院すれど全治せぬ状態から好転全快の報告。
- (八) 関節リュウマチ並に神経痛で入院しても全治不能の難症が好転して楽に歩行できる報告。
- (九) 喘息で注射するほど発作してくる病原と副作用の滲毒を解毒好転して100%全治した報告。

中村菌化学研究所

京都市東山区鞠町五条南
電話 祇園(6)2364・0522番

Nakamura Fungus Chemical Lab.
Sayamachi Gojo, Higashiyama-ku,
Kyoto, Japan

御たを
つなを
告なを
本に名
覧誌入
記下

新刊予告 (二月下旬刊行予定)

大正大学教授 佐藤良智 著

真理のはなたば

新書 七十円

若き人びとにおくる佛教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

法然上人鑽仰会編

浄土日常勤行式解説

新書 三十円

檀信徒の方々への信仰の手引書として御利用下さい

東京都品川区上大崎一ノ七八二

法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

日本一の生産・設備

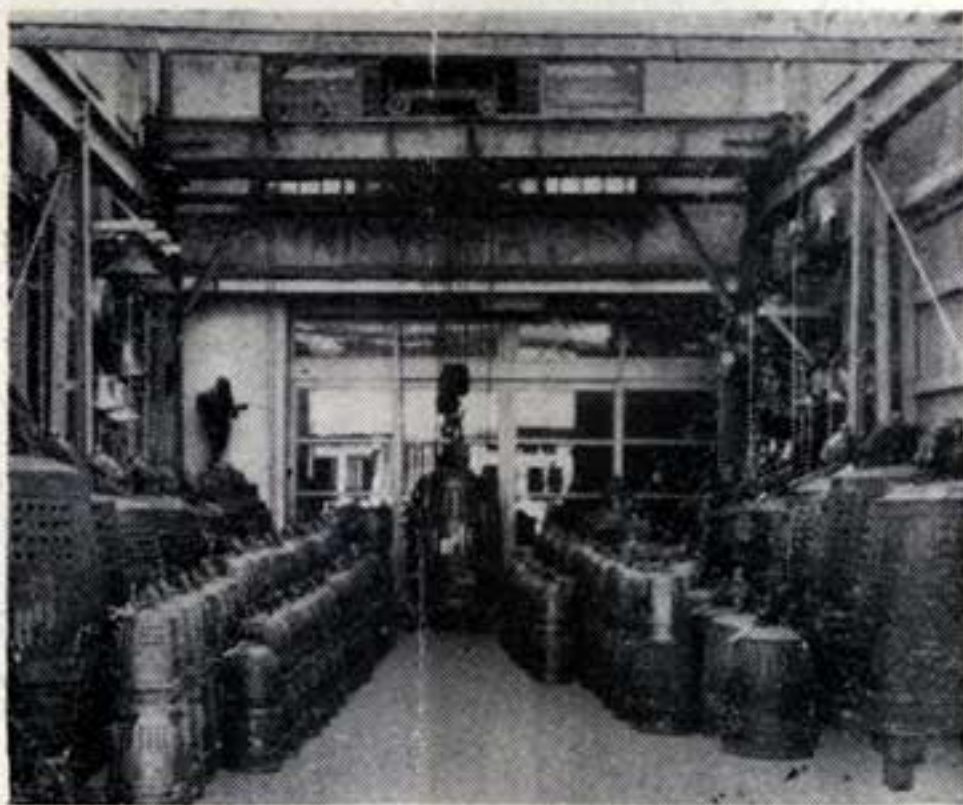
梵鐘 (54cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (21cm~51cm)

音響 理学博士 青木一郎先生
日展参事 賞

梵鐘界の権威 芸術院賞 香取正彦先生
受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)

鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分 (梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社

老子製作所 大阪支店

電話大阪 (34) 8847番 本社工場 高岡市横田